

令和5年度 第2回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和6年2月27日(火) 14:00~16:00

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 加藤弘子、杉浦幸子、長門佐季、橋本善八(部会長)、藤嶋俊會

事務局 土方(館長)、佐々木(副館長)、佐藤、山崎、片岡、重森、石原、喜多、澤田、
細川、澁谷、千村、鈴木、笹川(市民文化局市民文化振興室)
小山(指定管理者)、山内(指定管理者)

■傍聴者 1名

■議事

・令和5年度 事業経過・報告

1 展覧会事業

(1) 企画展

ア 「顕神の夢—幻視の表現者—村山槐多、関根正二から現代まで」展

イ 「凱旋!岡本太郎」展

ウ 「TARO賞の作家III 境界を越えて」展

エ 「第27回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)」展

(2) 常設展

ア 「岡本太郎と太陽の鳥」展

イ 「岡本太郎とスポーツ」展

ウ 「人のかたち:岡本太郎の人体表現」展

2 資料収集・整理、調査研究

3 作品の保存・修復、貸出

4 普及企画

5 広報活動

6 施設・設備の整備

7 その他

(1) 予算・決算

(2) 統計データ

(3) 展覧会ポスター

・令和6年度事業予定

・令和5年度事業評価

■議事録

○開会

【土方館長挨拶】

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である5名出席により、会議の成立を報告。
傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【橋本部長挨拶】

【事務局より議題1（展覧会事業）について説明】

加藤委員： バランスよく展覧会を組んでいる。夏休みや秋に合わせるなど来館者のニーズに合った時期・タイミングで展示をしているという印象を受けた。展覧会の広報は、積極的にやっていくということだけではなかなか難しいと思われるが、タイミングを掴むことでマスコミの方もからもいい反応が出る。非常に地道な努力されている印象を持った。

常設展は岡本太郎だけをテーマにしてやっているのか。

事務局： 基本的にはそうである。企画展の作家にセレクトしてもらい企画展と絡めた形で行ったこともある。

加藤委員： 先程、説明にもあったが、常設展ですくいきれなかった岡本太郎の写真を企画展で取り上げていく、というように、常設展と企画展が分かれているというよりは、リンクしながらやっていくということ、そして、岡本太郎のことを考えつつそれを広げていくということ、と考えてもよいか。

事務局： はい。これまでも常設展で取り上げてみた上で大きく展開できそうであれば、企画展で拡大するという事はよくやっている。今春予定の「岡本太郎の食」についても過去に常設で取り上げたものを拡大展開している。

藤嶋委員： 展覧会の作り方、ポイントはなにかという視点で展覧会を観ているが、「顕神の夢」展については、スサノオノミコトから馬場まり子まで入れてくるのかということが強烈で、未だに呪縛から逃れられていない感じがしている。凱旋展に絡んでは東京都美術館で、「岡本太郎展」を見た。パリで見つけた作品を観に行った。太郎にも弱弱しいところがあったのだろうと感じた。「TARO賞の作家」展については、男性二人は、理屈では理解できるが感覚では分かりにくかった。若木さんの版画はとても感動した。TARO賞については、丁寧にやっている人とTARO賞的な作品を持ってくるというバランス、太郎の両極が観られたのが良かった。「こういうことやっているんだ」という発見があると観て良かったという気持ちになる

が、それがあった。常設展は鳥やスポーツのようにテーマを絞って、「こんな視点もあるのだな」というものを取り上げたのはおもしろいと思った。太郎さんが筆を用いれば、人体表現もみんな自分自身になる。教育普及活動で子どもたちにそういう表現を体験させることは良い。

杉浦委員： 「顕神の夢」展に関しては、巡回の後半にかけて関心が高まっていて、岡本太郎美術館に行けないから足利市美術館へ行くという人が結構いた。巡回をしていくことの意味がとてもある展覧会だと思った。教科書的な日本の近現代美術の流れではないが、確実な日本の近現代美術の流れを広く深く見せてくれる展覧会だと感じ、学生にも見に行くことを勧めた。このような展覧会を立ち上げ実施できるという美術館の力を見せることが出来たということはとても重要だと思う。また、他の展覧会でも岡本太郎と出口王仁三郎さんの作品が一緒に出ていたことがあったが、作家同士が知り合いということではなく、作品の表現が連綿と繋がっていくということを感じられてよかった。

「凱旋！岡本太郎」展については凱旋というネーミングが太郎らしく、華々しく、また、「展覧会 岡本太郎」に行けなかった方にもここに行けば観られるということも伝えられていて非常に良いと思った。「TARO 賞の作家」展は観ることが出来なかった。若木さん達の最近注目されている方々を紹介されていた展覧会を観られなかったことは残念であった。常設展についてはどこを切り口にするのかというのを見つけるのは大変で、毎回チャレンジしていると感じた。

TARO 賞についてだが、五美大展や東京芸大の卒展を見ていると若い方たちや中堅の人たちに表現に対するモヤモヤがある感じられて、そういう方たちがエネルギーをぶつけてもいい場にこの賞があると今年観て感じた。表現しないと居られないという人たちの表現を受け止めて選んで展示するのは大変なことだと思う。また、賞を決めるということも大変で、それに向き合い続けているということに敬意を感じる。学生にも見に行くよう勧めようと思っている。

長門委員： TARO 賞について、いつもエネルギーをぶつけている感があって皆さん積極的に応募されている様子がある。オンライン応募が今回郵送より上回ったということだが、オンラインと郵送で違いがあるか。

事務局： オンラインの方が切手の負担はなく、より手軽ではある。
また、郵送応募の場合、作品に添付するポートフォリオに枚数制限がないが、オンライン応募の場合は出力して審査員に提示するため5枚という制限を付けている。

長門委員： 情報が一斉に来ると現場は大変であったであろうと思う。媒体が違うことでなにか差が出るか気になったので質問した。

館長： 今後オンラインの応募は増えると思う。若い人は紙ではなくデジタル媒体になじんでいる。現代美術が若い人をターゲットにするなら美術館が合わ

せていくしかないと思う。

杉浦委員： 今回入選の方に海外の方がいるが海外在住の方か。

事務局： 今回は日本在住の方。海外からの応募はあった。

長門委員： 海外の方も対象とするなら、オンラインは有効になるだろう。

橋本部部长： 621点の応募というのは増えているのか。オンライン効果といえるか。

館長： 増えている。オンライン効果といえるだろう。ただし、手軽に応募できる分、玉石混交ではあり、選出作業も大変になってくる。

TARO 賞は他の公募展にはないということが審査の一つの尺度になっていて、他にはない破壊力みたいなものがあるのではないか。

橋本部部长： スポーツ展は面白かった。太郎の写真の活用方法は色々ありそうだ。

【事務局より議題2（資料収集・整理、調査研究）から議題7（その他）について一括して説明】

長門委員： 教育普及活動を積極的にされている。今年度は認知症の方対象のプログラムを行い、また、来年度は視覚障害の方向けのプログラムを予定しているということで、多様な来館者に向けて取り組みを行っており学ぶことが多いと感じた。

館長： 館内の会議の中で、障害者の来館が飛躍的に伸びているという報告があった。来館した障害者の方が満足感をもって他へ発信してくれた結果と考えられ、大変ありがたい。

藤嶋委員： イベント等の教育普及事業については、固定した参加者の割合はどれくらいか。

事務局： 割合は出していないが何年も通って参加してくれるお子さんもいる。また、親が年間パスポートを持っていて、イベントにも参加するという方も多い。ただ、リピーターばかりが多くを占めるというわけではなく、ちらほらと見受けられるという感じである。

橋本部部长： 資料 P39 のアンケートの結果を見ると、始めて来館するという方が 109 名いる。まだまだ、新しいファン層がどこかにあるという証明だと思う。SNS のフォロワー数も増えている。また、先ほど話があったような障害者のネットワークでの口コミなどもあり、広報の仕事としても良い効果が出ていると感じた。

杉浦委員： 教育普及活動、アートと人をつなぐ活動は素晴らしいと思う。
コミュニティ、障害を持った方、多様な方に来館してもらうということは世界的な潮流になっているが太郎美術館はその先端を行っているといっていると思う。世界的にも認知されてもいいレベルの活動であると思っている。市が「アート・フォー・オール」を掲げ、モノとコトの両方に着目している状況なので、「モノ」を見せる展示のみでなく「コト」を起こすことで未来の来館者を育てているということを伝えるイベント等があってもよいと思う。また、外部から発信するというのも一つの方法ではとも考えており、

例えば博学連携の一環として、大学で岡本太郎美術館の取組の軌跡の様なものを紹介するシンポジウムを組んで共同研究のような形で、出来たらよいと思っている。学生への刺激になるし館を紹介するという意味でも良い連携となる。

今回、高校生のインターンシップを始めたというのはとてもよい。今、大学の入試が、社会においてどういう活動をしているかを評価する総合型選抜入試へシフトしている。美術館でインターンシップをしたことは高校生にとってプラス要因であるので、高校の進路指導や美術予備校も力を入れているところである。そういうところとつながることができれば、違う視点からも来館者の獲得やイメージPRにも役立つ。

- 館長： 常に、発信すること・アピールすることも大切と職員に話している。
- 杉浦委員： 来館者アンケートに来館理由についての設問を入れると良い。なぜ岡本太郎美術館に来たのかということは、対外的アピールになると思われる。
- 橋本部会長： 展覧会の認知経路を調べると良い。社会的なメディアが扱わないと思われるような展覧会の広報を打つ際の有効なデータになる。
- 加藤委員： 認知症のプログラムについては、かなり全国的に広がってきている。それを踏まえて、いかにこの美術館らしいプログラムとして出せるか、もしくはどう地域と連携しているのかというような個性を出していくということが、地域の方にとって受け止められやすいものにするために必要になってくるだろう。教育普及活動においては、今どの美術館も子ども・高齢者・学校を大きな基本要素としていて、地域としての結びつきをどう出していくのが課題だと思われる。
- 教育普及のプログラムは先着順になっている。このプログラムにどれだけ需要があったかは先着順ではわからない。需要数を知るためには抽選等の他のやり方が必要になる。プログラムへの関心度の高さを図るには全体の申込数がわかった方がよい。需要数が美術館にとっての実績数となり得る。教育普及のプログラムでは、需要数に対して実際に参加できる人の人数が限られてしまうということが課題としてある。なかなか先着順では参加の機会が得られなかった人へのプログラムもあっても良いのでは。平塚美術館でも当日自由参加のプログラムを行った。賑わいを作るということも大切である。
- 事務局： 参加人数のカウントが出来ないので数字の記載はしてないが、自由参加型のプログラムは行っている。
- 加藤委員： 美術の活動に興味を持って能動的に参加している方の潜在的な数になるのでそういう数をうまくカウントして、前面的に出して良いと思う。
クラウドファンディングで作品の収集は可能か。

- 事務局： 現状は難しい。実際に予算がついている業務については利用できず、新しい事業でかつ収集した資金で実施できるものである必要がある。市では、規程を検討しつつ実施している状況であり、今後は変わっていく可能性はある。ただ、作品の購入が出来る様になるかという、まだまだ先ではないか。現在は、一般的なクラウドファンディングではなく、ふるさと納税を利用した寄附型クラウドファンディングのみ取り扱っている。資金課が主導で仕組み作りをしていて、美術館のみでクラウドファンディングをすることは出来ない。
- 加藤委員： 自治体によって違うようだが、横須賀美術館では成功していると聞いているので、クラウドファンディングが資金面でバックアップできる形になれば良いと思う。
- 杉浦委員 クラウドファンディングの視覚障害のプログラムは当事者と一緒にインクルーシブに作るというのが良いと思う。
- 橋本部部长： 視覚支援機器を使ったイベントは行うのか。
- 事務局： プログラムに入っている。
- 橋本部部长： 世田谷美術館でも、パブリックシアターを持っているので視覚支援機器を使って芝居を観るイベントをしようかと考えている。利用者数の件になるが、世田谷美術館ではオンラインプログラムの視聴者数を記録し、リアルではない来館者を数値化し実際の来館者とは別に報告するようにしている。岡本太郎美術館でもそこもアピールした方が良いのでは。また、展覧会の関連企画のレクチャー等のイベントも普及事業になるのでその参加者数も、プログラムに参加した人の数として、しっかり提示した方が良い。
- 加藤委員： 展覧会観覧数とプログラムに参加した人は別にカウントすると分かりやすい。教育普及のプログラムが盛んに行われているということを実態として示せる。
- 館長： 対外的な実績報告については、しっかりしていかななくてはならないと考えている。
- 橋本部部长： 収集に関して。今回、岡本一平のデザインの古い資料等を買っているが情報収集はどうしているか。
- 橋本部部长： 古書店や画廊から情報をもらってリサーチしている。
- 事務局： 将来的には、岡本一家の展覧会を考えているが、その展覧会で使える資料も購入したいと考えている。

【事務局より議題「令和6年度事業予定」について説明】

橋本部部长： 来年度も今日出された意見を参考に活発な事業展開をしていただきたい。

【事務局より議題「令和5年度事業評価」について説明】

杉浦委員： 内容・課題・反省を含めた自己評価をABCで提出してもらえると外部評価

しやすい。

加藤委員 自分たちがどこまでやったのか、また、これまで以上に頑張ったということがあれば自己評価をして提示してもらえると分かりやすい。

橋本部長 実施してどのような手応えがあったか、また、足りないところや今後課題とするところを記載すると、委員としては理解・評価しやすい。

事務局 次年度、記載方法については工夫をし、必要な報告については追加したい。

○閉会